

## Ch. 1 Standards and expectancies: An introduction and overview. 基準と期待：導入と概要

Monica Biernat (2005) *Standards and expectancies. Contrast and assimilation in judgments of self and others.* Essays in social psychology. Psychology Press. pp.1-6.

Rep. 小森めぐみ<sup>1</sup>.

### 導入

- ・ 人生とは比較であると言っても過言ではない。私たちの経験や判断、私たちに起こる出来事は、何らかの比較基準や準拠枠を背景として成立しているものである。
- ・ 私たちの発言は、すべて何らかの基準をもとに行っていて、相手もそれをわかっていると仮定
  - ▶ “うちの子5才なんだけど、ほんとに利口でね” …一流大学にすぐ入れるほどではない
- ・ 一見、絶対的な判断でさえ、何らかの基準をもとにした相対的なもの(Huttenlocher & Higgins, 1971)

### 本書のねらい①

- ・ 本書ではまず、他者と自己の評価における判断基準と期待の役割に注目する
- ・ 本書の中心的内容の一つは、同化と対比(contrast)のどちらかに概念化できる
  - ▶ 同化(assimilation)：評価対象が基準や期待に近づくように or 一貫する方向に判断される
  - ▶ 対比(contrast)：評価対象が比較基準とは離れるように or 反対方向に判断される
- ・ 本書における“判断(judgment)”は、評価（たとえば特性次元での評定）だけでなく、感情的側面（たとえばムードや自尊心を含むもの）や行動的な側面をもつものも含んでいる

#### 同化・対比効果の研究の紹介①対人認知

- ◇ 比較ターゲットがプライムされた特性形容詞に一貫して判断される (e.g., Higgins, Rholes, & Jones, 1977)
- ◇ ステレオタイプ化された集団のメンバーは、相反する集団のメンバーよりもステレオタイプの特性をもたないと判断される(Biernat & Kobrynowica, 1997)

#### 同化・対比効果の研究の紹介②自己評価

- ◇ 人は上方比較に対して、ポジティブな自己評価の形で反応する（スターへの自己の同化研究: Lockwood & Kunda, 1997)
- ◇ 理想自己と現実自己のギャップについて考えることで、悲しみが増加(Higgins, 1987)

#### 同化・対比効果の研究の紹介③行動

- ◇ 自己の基準に合致するような行為への従事(Carver & Scheier, 1998)、楽観的な“リスクイメージ”に同調するような健康関連行動(Gibbons & Gerrard, 1995, 1997)
- ◇ プライムされた事例(Dijksterhuis, Spears, Postmes, Stapel, Koomen, van Knippenberg, & Scheepers, 1998)や集団ステレオタイプ(Schubert & Hafner, 2003)と相反する行動

- ・ 本章での中心的な問い：社会的判断において、いつ同化が生じ、いつ対比が生じるのか？

### 本書のねらい②

- ・ この本でとりあげるもう一つのテーマは、比較と判断の構成主義的な性質を明らかにすること

<sup>1</sup> 一橋大学社会学研究科

- 私たちは自ら、さまざまな比較・判断の準拠点（知識ベース、状況の特徴、主観的な評価基準など）から一つを選び、利用する(Kahneman & Miller, 1986; Miller & Prentice, 1996)
- 人は“積極的な比較者(active comparer)”であり、特定の需要を満たすために比較ターゲットを選択・構築する (e.g., see Goethals, Messick, & Allison, 1991)。
- 基本的な認知メカニズムである知識のアクセシビリティの影響で、文脈によって活性化した構成概念が、気づかないうちに私たちの判断に影響している(Higgins, 1996)
- 私たちが無自覚に、無意図的に社会的比較をも行っていることを示す研究もある(Gilbert, Giesler, & Morris, 1995; Mussweiler, Ruter, & Epstude, 2004)。
- ・ 知覚者がどのくらい環境や比較基準をコントロールできるものかという問題も、本書で扱う。

### 用語の定義①基準とは？

- ・ Higgins(1990) 基準(standard)とは、経験、欲求、あるいは権威によって設けられた、量、程度、質(quality)や価値(value)を測定するための判断基準(criterion)、規則(rule)のこと。(p.302)
- ・ Miller & Prentice (1996) 社会的基準(social standard)とは特に、個人を比較する際に比較点(a point of comparison)となりうる、人や人の集まりのもつ属性のこと。

### 基準の分類

- ・ Higgins(1990; Higgins, Strauman, & Klein, 1986)は、基準を3つに分類している
  - 他者の属性に関する信念である**事実基準(factual standards)**、優秀性、容認可能性の基準(Higgins, et al., 1986, p.30)である**指針(guides)**、存在するであろう(will)、存在しうる(could)、存在するかもしれない(might)ものを考慮した基準である**可能性(possibilities)**
- ・ 本書での事実基準は、他者を判断する際の基準としての自己、自己を判断する際の基準、自己・他者を判断する際の基準としてのステレオタイプを指す。また文脈（判断のちょうどその場面でアクセシブルになる情報を指す）も、事実基準として考える。
- ・ 本書での指針や可能性は、自己を判断する際の規準としての目標、価値、義務(“oughts”)といった内在化された表象(internalized representation)
- ・ ただし、事実基準が指針・可能性として機能する場合もある

### 用語の定義②期待とは？

- ・ 期待とは、“将来の事態(state of affairs)”に関する信念のこと。可能性にすぎない(merely possible)～ほぼ確実(virtually certain)の範囲で起こりうる結果と未来とを結びつけた、主観的可能性(Olson, Roese, & Zanna, 1996, p.211)。
  - 集団ステレオタイプは、集団の属性についての期待を与え(e.g., Hamilton & Sherman, 1994)、集団メンバー評価の判断基準ともなる(Biernat, Manis, & Nelson, 1991; Biernat & Manis, 1994)
  - 目標や憧れは、知覚された将来の可能性または期待というかたちでの概念化も可能(Higgins, 1990; Markus & Nurius, 1986; Schlenker, 1985)。

### 基準と期待の関係

- ・ 基準と期待は合致する場合もしない場合もあるし、互いの裏づけとなる場合もならない場合もあるが、その方向は予測可能である。

- ・ 期待は妨害されると、否定的な感情、より深い（システマティックな）処理、属性の探索、確実性の減少、期待についてのより明白な知識や自覚につながる(Olson et al., 1996)
- ・ 基準への到達失敗も同様の効果(e.g., see Stangor & McMillan, 1992; Bettencourt, Dill, Greathouse, Charlton, & Mullholland, 1997; and Biernat, Vescio, & Billings, 1999; Higgins, 1987 on self-evaluation)
- ・ このことから、本書では基準と期待とを交換可能な用語として扱う。
- ・ ただし、基準は対比効果(たとえば、ターゲットが基準と比較され、基準と違うと判断されること)と、期待は同化効果(たとえば、期待が解釈の枠として機能することで、ターゲットが期待に沿った形で知覚されること。e.g., Manis & Paskewitz, 1984a)とつながっていると考えられがち。

## 構成と概要 (P.4)

### 本書の構成

- ・ 本書は3つの大きなセクションに分けられている。
- ・ 第1セッションでは、同化と対比のモデルの基本的な原則について述べる
  - 第2章：判断に影響する文脈手がかりの役割に注目して、同化効果と対比効果のどちらが生じるかを決定する10の要因について実証的知見を中心に述べる。
  - 第3章：第2章で明らかにされたそれぞれの“ピース”をまとめる最近の理論モデルを紹介
- ・ 第2セッションでは、他者の判断を導く基準と期待について述べる
  - 第4章：他者を判断する際の自己と他の事例の役割について述べる。類似性判断やフォールス・コンセンサス・ユニークネス、属性の転移(transference)などについて。
  - 第5章：社会的判断におけるステレオタイプの役割について述べる。ステレオタイプ化のプロセスを示すモデルや、いつステレオタイプとの同化・対比が起きるかなどについて。
  - 第6章：筆者が主張する、基準のシフトモデル(shifting standard model)を、ステレオタイプが判断の基準となり、判断の性質に応じて同化・対比につながることを説明
- ・ 第3セッションでは、自己評価に使われる基準について述べる
  - 第7章：個人的基準(personal standard)の役割を検討する。自己客体視やディスクレパンシー理論をレビューし、自己制御を同化プロセスの一部として考える
  - 第8章：自己判断におけるステレオタイプの役割に注目し、自己ステレオタイプを同化効果として考えるほか、自己とステレオタイプとの対比についても検討する。
  - 第9章：自己を判断する際のもうひとつの基準である特定の他者、つまり社会的比較について検討する。社会的比較の分野で昔から問題となっていることについてレビューする
- ・ 第10章では、本書の主要なテーマを再度見直し、自己・他者判断のトピックが日常生活における比較や判断の問題にどう統合されていくかという問題について述べる。

## 本書では取り扱わないトピック (P.6)

- ・ 基準と期待とはどんな経験にもつきものであり、それらをすべて網羅することは不可能。
- ・ 自己効用感(self-efficacy; Bandura, 1977, 1997)、獲得動機(e.g. Atkinson & Feather, 1966)、他の期待価値モデル(e.g. Abelson & Levi, 1985; Ajzen & Fishbein, 1980; Feather, 1967, 1990)、自己成就予言(e.g. Jones, 1986; Jussim, 1986)などは扱わず、反実仮想(e.g. Miller, Turnbull, & McFarland, 1990)、相対的剥奪感(e.g. Abeles, 1976; Pettigrew, 1967)も、ほぼ扱わない。